

最弱ジョブ  
【弓使い】の俺、うっかり  
迷惑／Sランクパーティーを  
ボコして  
しまう

果一  
hatehajime  
— illust. みかみマイケル

# CONTENTS

プロローグ	冒険者の常識	007
第一章	最弱最強の【弓使い】 <small>アーチャー</small>	023
第二章	学園のアイドルと不穏な兆し <small>きざ</small>	113
第三章	高嶺乃花	191
第四章	絶望砕く【弓使い】 <small>アーチャー</small>	225
エピローグ	ダンジョン運営委員会からの誘い	281

Weakest Job  
Archer

いぶき かける  
**息吹翔**

本作の主人公。  
最弱<sup>ジョブ</sup>役職と蔑まれる<sup>アーチャー</sup>【弓使い】にして、  
最高位ランクに到達した最強の冒険者。  
目立ちたくないタイプだが、  
困っている人は放っておけない。

きやま ごうき  
**木山豪気**

有名Sランクパーティー  
【ボーン・クラッシャー】の一員。  
傲岸不遜な態度ながら、  
世間からの好感度は高い。

すずしろ まこと  
**涼城真美**

コミュカお化けな乃花の親友。  
【盾使い】として仲間を守る。

たか のんか  
**高嶺乃花**

翔と同じ学園に通う、  
才色兼備の少女。  
以前から翔のことを  
知っているらしく……？

てら じま みづき  
**寺島瑞紀**

ダンジョン運営委員会支部長で、  
豪胆な性格の美女。  
絶賛彼氏募集中。

いぶき ありさ  
**息吹亜利沙**

翔の妹で、天真爛漫な  
ムードメーカー的存在。

やしろ えいじ  
**八代英次**

気さくで裏表がない、  
翔のクラスメイト。  
失言が多いが憎めない男。



プロローグ

# 冒険者の常識



W e a k e s t   J o b

A r c h e r



そこは、大自然を絵に描いたような雄大な光景が広がっている場所だった。

広がる蒼穹、茂る緑、崖下の滝壺へ落ちていく水音。アマゾンの奥地にでも迷い込んだかと思わされるほど、壮大で美しい外の世界。

十人中十人が、そう答えるはずだ。

ここがダンジョン——外の世界とは異なる法則が働く、閉じた世界だと知らなければ。

「はっ、はっ！」

木々の間の獣道を、俺——息吹翔は息を弾ませながら駆ける。

枝の上で羽を休めていた鳥達が、俺の接近に気付いて一斉に飛び立つ。が、よく見ればそれらは鳥じゃない。

カメレオンのようなは虫類の外見に鳥の翼をくつつけたような、歪な生き物——モンスターだ。

ガーガーと耳に残る鳴き声を振りまいて、逃げるように飛び去っていくモンスターを尻目に、俺はひたすら駆ける。

盛り上がった木の根を避け、道を通せんぼするやたら耳が発達したウサギのモンスターの上を飛び越え、やがて鬱蒼と茂る森を抜ける。と同時に、視界が一気に開けた。

「いつ見ても圧巻だ」

思わず口から、感動の言葉がこぼれ出る。

無理もない。この景色には、誰だつて目を奪われるはずだ。

林冠がなくなつて顔を見せる天井には、青白い光を放つヒカリゴケが無数に生えており、閉じた世界で天蓋の役割を果たしている。

その光の下を悠々と泳ぐ黒い影は、「ワイバーン」と「グリフォン」だろうか？ いずれも、ファンタジーにはよく登場する空想上と思われていた生物達だ。

だが、あまりにも雄々しく猛々しいその巨軀は、幻想や妄想の産物ではないということを確かに証明している。

切り立った崖の先端付近に立つ俺の場所からは、さらに遠くまで大自然が見て取れる。

まるで異世界に紛れ込んだかのような絶景。

「よし、行くか」

乱れた息を整えて、俺は背中に背負っていた愛用の「弓」を取り出す。

小さい頃から使っていたそれはすっかり手に馴染み、探索する度に驚きを与えてくれるダンジョンで、心強い相棒になつてくれる。

長年苦楽とともにした弓を左手に持ち、矢筒から矢を取り出す。先端の鏃には返しがついていて、後端にはロープが結びつけられている、特殊な矢。

それを弓につがえ、強く引き絞る。片目を瞑り、光で満ちる天井に狙いを定めて、矢を解き放つ。刹那、空気を裂く鋭い音と共に矢が射出される。

空に立ち上る矢は音速を超えて飛翔し、空を模した天蓋に突き刺さった。

ロープを軽く引つ張って天井に刺さった矢が抜けないことを確認し、強く握る。それから——勢いを付けて、崖から空中へ飛び出した。

全身にぶつかってくる心地よい風を感じながら、ターザンの要領で空を渡る。途中、空を飛んでいた“ワイバーン”に並ぶ。

漆黒の鱗に覆われた巨軀の先端にある二つの赤い目がギョロリと俺の方を向くが、特に何もしてこない。

“ワイバーン”は、見かけによらず温厚で、こちらから何かしない限りは襲ってこないからな。

——もっとも、ちよっかいを出して怒られたら、高位冒険者でないと手が付けられないくらい凶暴になるのだが。

“ワイバーン”を追い越し、風を追い越し、振り子の要領で俺の身体は地面に近づく度にぐんぐんと加速する。

あつという間に近づいてくる地面。着地点では、木々が生い茂っていない代わりに花畑が広がっていた。

ダンジョン内にもみ自生する独特の花々の絨毯が、空から降りる俺を出迎える。

が、不意にその花畑の一部の土がぼこりと盛り上がり、地面から黒い影が出現する。

それは、巨大な花だ。世界最大の花はラフレシアと言われているが、おそらくそれよりも一回り

大きい。

六枚、放射状に広がっている花卉は赤黒い斑点模様で、直径は大人が両手を広げるよりなお大きい。

その桁外れの大きさも驚きだが、それ以上に驚きなのは、花の中心点にめしべが発達した口があることだ。

Cランクモンスター、ギルティ・フラワー”。

普段は地中にいて、低空を飛ぶ生き物や冒険者を察知すると、その進路上に突如として生えてくる、肉食のモンスターである。

つまり——ヤツは今、俺の着地予想地点にいるわけで。同時に、俺を獲物と定めてしまったことが運のつきでもある。

「——“セット”」

右手でロープを掴んだまま、不安定な風に煽られながら、ポケットから小さな弓を出して構える。弓矢と言いつつ、プラスチックと弾性の高いゴム紐を組み合わせて作った、掌サイズの“なんちゃって弓矢”である。

まあ、見た目は弓矢だが実質的にはパチンコだ。

その小さな弓に、専用の小さな矢をつがえ、左手の薬指で弦を引く。

“ギルティ・フラワー”は特に硬い外皮に覆われているわけではないものの、意外に高い耐久力

を誇る。——唯一、口の奥にある核を除いて。

吹き付ける風、高速で動く視界、小さい的。——これを射貫いたら、さぞ心地よいだろう。

同時に、俺は改めて強く思う。

この瞬間が、何より好きだ。

狙いを定めて集中するときに、獲物と矢の先端以外の全ての世界が、音と色を失っていく感覚。誰にも見られていない、俺と獲物の二人きりの世界で、それ以外のすべてが遠くなっていく。

耳の横を擦過する風の音も、はるか後方の“ワイバーン”の鳴き声も。一面の花畑すらセピア色に染まっていく。

極限の集中。獲物との二人だけの会話。それを——弦を弾くことで、終わらせる。

「当たれ！」

そんな願いを矢に乗せて、一撃を解き放つ。

小さな矢は弾丸のような速度で敵めがけて肉薄し、彼我の距離を瞬く間に消し飛ばす。

飛翔する矢は“ギルティ・フラワー”の口の中を突き抜け、喉の奥にある核を狙い過ぎたずぶち抜いた。

弱点を一撃で吹き飛ばされたことで、花型のモンスターはその存在を保つことができず、たちまちしおれていく。

「よし」

花が枯れ落ち残骸になるのを見届け、俺は小さく頷く。

その間に俺も地面に到達。美しい花畑に、ふわりと着地するのであった。



ダンジョン。

現代社会では聞き慣れないはずのその言葉が、西暦2030年の今では日本中で囁かれるものへとなった。その原点は、三十年前まで遡る。

二十一世紀の始まり。日本各地に突如としてモンスターが蔓延る魔窟“ダンジョン”が出現する怪現象——通称“ダンジョン事変”が起こった。

当時、2000年問題で浮き足立っていた日本を、想像の斜め上に行く方向で裏切ったダンジョンの出現。

それは大規模な地殻変動により生まれたものとされているが、七割以上が未解明である。

わかっているのは、空想の産物とされたモンスターが生まれ出る魔境であることと、外の世界とは異なるルールが存在すること。ダンジョン内においてのみ魔法やスキルと呼ばれる超常の力が使用可能になるのも、そのルールの一つである。

ちなみに、今俺がいるセンター・ダンジョンは、県内でも最も大きなダンジョンだ。

先程の大自然の階層——二十二階層を離れた俺は、『ワープポータル転送陣』でさらに地下に降り、二十五階層にある安全地帯に来ていた。

二十五階層は、二十二階層ほど広くなく、天井もそこまで高いわけではない。

その代わり、モンスターに襲われる恐れのない本階層は冒険者達の出入りが桁違いに多く、たくさんの人が集まっている。

それに、人が多く集まる理由は「安全だから」というだけではない。

「つらつしやい！ 四十階層の掘り出しものだよ！ “マンドラゴラの涙”なみだなんて稀少アイテム、うちでしか手に入らないよお！」

「さあさあ、どの冒険者が一番魔石を多く採ってこられるか、賭けに乗るヤツはいねえか!?」

「換金はこのディーン商会にお任せを！ 一階層にある冒険者ギルドよりも高く買い取ってやるぜ？」

石材で舗装された道を人の波をかくぐりながら歩いていると、両側からそんな呼び込みの声が聞こえてくる。

それもそのはず。この安全地帯には、道沿いに二百メートルほど市場が設けられている。

露天商から宿屋、換金所に飯屋まで、さながら宿場町のような様相を呈しているのだ。

「つ！ お、おいアレ見ろよ。あの白い短髪の……」

「あ？ ……って、マジかよ」

人々の喧噪の中、不意に聞き慣れた類いの言葉が耳に届く。

何気なくそちらを見ると、露店で小物を新調していた二十代くらいの男二人組が、好奇の視線をこっちに向けていた。白い短髪とも言っているから、俺のことで間違いないだろう。

いや、他にも俺に何らかの視線を注いでいる者はいる。

割合としては好奇が二割、侮蔑が三割、残りは呆れといったところか。

「あの子が背中に背負っているのって弓矢じゃね？」

「マジじゃん。あんなカスみたいな役職に就いてるとかかわいそ！ 誰か教えてやれよ」

「は？ お前知らねえのかよ。あの子、この階層でたまに見かけるけど、もうずっとあの役職のままだぞ？」

「ぶっ、なんだソレ。ずっと【弓使い】とか、命知らずにもほどがあんだろ」

あの二人、なかなか好き勝手言ってくれるな。

少々ムツとしながらも、ここはスルーする。大人な対応を心がける、みたいな殊勝な理由ではない。そんなことをしても、まったく意味がないからだ。

なにせ、この場にいる全員が、彼等二人と同じ認識だからであって——

「余程の命知らずか、あるいは最弱役職で逆張りしてるだけ、か」

「どっちでもいいさ。どっちみち頭の足りねえバカってことなんだからよお。なにせ——

【弓使い】なんて、転職必至の最弱役職なんだからよお」

侮蔑と哀れみを込めて、男達は俺の背中を見送る。

——役職<sup>ジョブ</sup>というのは、ダンジョンに冒険者登録したときに選ぶ役職を指す。

人気なのは、剣術のスキルを操り無数の斬撃を放つ前衛職の【剣士<sup>フエンサー</sup>】、杖を持って数多<sup>あまた</sup>の魔法を自在に扱う【魔術師<sup>マジシャン</sup>】あたりか。他にも、【闘士<sup>ファイター</sup>】や【盾使い<sup>シールド</sup>】、【回復師<sup>ヒーラー</sup>】など、魅力的な役職が多く存在する。

そんな数ある役職<sup>ジョブ</sup>の中で、とびきり不人気なのが、話題に上がった【弓使い<sup>アーチャー</sup>】だ。

なぜなら、地味で弱いくせに扱いが難しく、半年に一回行われるランク昇格試験でのランク昇格率も低いから。

それが、ダンジョンが一般に開放されてから、今日まで変わらない確固たる認識。

だから【弓使い<sup>アーチャー</sup>】を自分から選ぶ物好きはいない。仮に選んでもすぐに挫折<sup>させう</sup>したり、上級者に諭<sup>さと</sup>されたりして、ダンジョン運営委員会に申請して役職を変更するケースがほとんどだ。

だから、俺みたいに、好きで【弓使い<sup>アーチャー</sup>】を続けている人間は、「ちよつと変わった子」としか思われない。おい誰がちよつと変わった子だ、ブツ飛ばしてやろうか。



カランコロン。

喧噪<sup>けんそう</sup>薄れる裏通りにある平屋<sup>ひらや</sup>の木造建築の扉を開けると、扉に据え付けられた鈴が軽やかな音を立てた。

「らっしやい……お！ お前さん、よくまた来てくれた！」

カウンターにいた死んだ目つきをした大柄の男性が、俺を振り返るなりパツと顔を輝かせる。

浅黒い肌<sup>あさぐろ</sup>に筋骨隆々<sup>きんくろうろう</sup>な体つきのおっさんだ。

見かけだけなら、異世界で戦斧<sup>バトルアックス</sup>を持って戦っていても不思議じゃない出で立ち<sup>いでたち</sup>である。それはそうと。

「またって……俺、前回ここに来たの一月以上前なんですが？」

ジト目でこの店の——武器屋の店主である吉田さんに告げる。

「仕方ないだろ。ウチの客で一番<sup>ひくい</sup>量<sup>りょう</sup>肩<sup>かた</sup>してくれてんのがお前さんしかないんだからよ」

「ええ……それ経営大丈夫なんですか」

「大丈夫なわけないだろ。お前さんのお陰でなんとか黒字になっちゃいるが、先週<sup>けいば</sup>の競馬<sup>けいば</sup>で全部消えてったから、総合的に大赤字<sup>ちくしゅう</sup>だド畜生<sup>ちくしゅう</sup>」

「ああ、なら大丈夫そうですね」

「だから大丈夫なわけないんだが!？」

嫁さんに怒られるくなど頭を抱える吉田さんだが、それは自分の責任だからなんとかしてもらうしかない。具体的には件の嫁<sup>くた</sup>さんに金の玉を蹴<sup>け</sup>り上げてもらって、馬券をすべて没収してもらおう

とか。

俺は小さくため息をついてから、吉田さんのいるカウンターの方へ歩いていく。

店内の壁には、ずらりとよく磨かれた武器が並んでいる。

片手半剣に長剣、バスターソード ロングソード 籠手に、バトルアックス 戦斧に、ハルバード、槍などの近接戦用のものから、魔法職用の杖

まで、幅広く並んでいる。まあ、当然のように弓は見当たらないが。

それにしても、ガサツそうな見た目のわりに、店内は割と小綺麗なんだな。

部屋の掃除とか奥さんに丸投げして逃げてそうなのに……いや、むしろ尻に敷かれてるからトイレ掃除とか全部やってるのか？

「おいお前さん、今何か失礼なこと考えなかったか？」

「いえまったく、気のせいですよ。……それより、頼んだものできてます？」

「ああ、できてるよ。まったく、お前くらいなもんだぜ。こんな物好きなモン注文してくるヤツはよお。まあ、お陰でウチとしては数少ない収入になってくれちゃいるが」

頭の後ろをデカイ手でボリボリと掻きながら、もう片方の手をカウンターの裏に入れて大きな麻袋を取り出し、ドカリとカウンターの上面に載せる。その中には、大量の矢が入っていた。

「注文通り、五百本きっちり入ってるよ」

「どうも。支払いは現金でいいですかね？」

そう聞きつつ、俺も懐から小さな麻袋を取り出す。その中から、紙幣を大量に出してカウンター

の上に置いた。

「これでいいですか？」

「お前……いつも思うが、どこでそんな大金をかき集めてくんだよ」

やや呆れ顔で、吉田さんが応じる。

「？　どこって、倒したモンスターを正規の手順で換金してるだけですが」

「はっ、冗談。換金率も渋いってのに、こんな大金を簡単に入手できるもんかよ。まして、アーチャー【弓使い】なんて最弱役職で、大体、そんな華奢な体つきで冒険者やってるってことすら疑わしいってのに」

鼻で笑う吉田さん。欠片も信じていないらしい。

一応、本当のことなだけど……それに、体つきの話なら一応コンプレックスなんだけどな。同年代の男子より小柄で線が細いから、「それで冒険者やってるの？」なんて言われたりする。

「でも、いつも本当に助かってます。ここ以外で、矢を売ってくれるお店は少ないので」

「……まあ、アーチャー【弓使い】自体絶滅危種だからな。商売にならねえから、普通は売らねえよ。正直、矢を作つてると、稀に来る他の客から『うわ、この見るからに風呂入ってなさそうなオッサン、なに無駄なことに時間掛けてんだ。だから客の来ない裏通りで寂しく営業する羽目になるんだよ』って可哀想な目を向けられるんだからな！」

「それは被害妄想が多分に入っていると思いますが？」

苦笑いしつつ、改めて吉田さんには感謝する。普通の武具店に行っても、それこそ門前払いされるのがオチだからな。

「ところでよ。お前さん聞いたか？」

「聞いたって何をです？」

「Sランクパーティーの【ボーン・クラッシャー】が、明日のタイムアタック大会に出場すんだよ！」

吉田さんがずっと身を乗り出して、目を輝かせる。

【ボーン・クラッシャー】——ああ、聞いたことがある。たしか、最近人氣が急上昇してる上位パーティーだ。個々人の実力もさることながら、パーティーとしての連携力も高いらしく、ミィハーな冒険者達の間で話題になっている。

口調にはやや粗野な点が目立つみたいだが、それがワイルドとして、かえって人氣になっているみたいだ。

「楽しみだぜ！ ああ、サインくんねえかな」

金勘定かねだんじょうをするのも忘れ、童心どうしんに返ったように瞳を輝かせる吉田さん。

【ボーン・クラッシャー】ね。まあ、来たところで会うわけでもないし、俺には関係のない話か。それより、明日から始まる学園生活の方に意識を向けるべきである。

「明日のタイムアタック大会、やっぱ【ボーン・クラッシャー】に賭けるべきか。いや、ここはあ

えて大穴の、全員【盾使いシールド】で構成された【攻撃力】永遠の0】に全額ベットするしかねえよなあ。オッズ二十倍だからな、ぐへ、ぐへへ……」

吉田さんというと、もうすでにお金の山（空想）にトリップしているらしい。この人、破滅するのが趣味なんだろうか。

「なあ、お前さんはどう思うよ。やっぱ、無難に【ボーン・クラッシャー】に賭けるべきかな？ それとも、大穴を狙うべきか」

「そうですね……お嫁さんに金属バットでフルスイングされてもいいなら、好きにどうぞ」

「……や、やっぱ明日はオフにするぜ」

第 一 章

最弱最強の【弓使い】

アーチャー



W e a k e s t   J o b

A r c h e r

それから一日空いて、四月六日。

今日から俺は、晴れて上等学園の一年生となった。

アマリリス上等学園。それが、今日から通う学園の名である。

十六〜十八歳を対象にした義務教育機関であり、十三〜十五歳を対象とした下等学園を卒業した者がそのままの流れで進学する場所でもある。

まあ、2000年初期までにあったという、中学や高校と似たようなものらしい。

ちなみに初等学園という、小学校に成り代わる六年制の学園も存在する。

ダンジョン事変のせいで社会様式が一変した今、変化に対応するため、本来では義務教育でなかった高等学校の進化形に当たる上等学園が義務教育化されている。

それはともかく、俺がこの学園で目指すのは“普通の学園生活”だ。

「なにせ、下等学園だとともに友達もできなかったしな……」

下等学園に上がってすぐに両親が事故で他界し、それから三年間、俺はまともな学園生活を送ることができなかった。

遠く離れた土地に住んでいる叔母さんに引き取られ、今は妹と三人暮らし。

慣れない土地、会ったことのない叔母、両親を失ったショックが重なり、妹は長い間家に引きこもっていた。

俺も引越した先の学園に馴染めず、妹の世話で学園を休むことも珍しくなかった。

そんな俺に引け目を感じていたのか、クラスメイトはどこか遠慮じみた距離感で接してきていたから、友達と呼べる人もいない。

だから俺は今度こそ、部活に励んで、放課後にフライドポテトを食べながら友人とテスト勉強をして、真面目に授業を受けて、でもちよっぴり居眠りをして。

そんな当たり前の学園生活を送りたいのだ。

入学式を終えて、割り当てられた一年B組のクラスに颯爽と乗り込んだ俺は、窓の手すりに身体を預け、校庭の桜の木から舞い落ちる桜の花びらを見てそんなことを考えていた。

今日から、新しい生活が始まるんだ！

期待に胸を膨らませ、俺は自分に割り当てられた席に向かう。

すると、俺の接近に気付いた前の席の男子が振り返るなり、なぜか驚いたような顔をした。

ツンツン頭で髪を染めている、目つきの鋭い少年だ。

なんか怖そうな人だけど、これから同じクラスになる人だし、仲良くなりたいな。挨拶はしかりしておこう。

「はじめま——」

「はあ!? なんて女子が男の制服着てんだよ!」

「なっ! 俺は男だよ!」

俺は思わず声を荒らげてしまった。

前言撤回。ちよつと仲良くはなれないかもしれない。

「ふつ、はははは！ 悪い悪い冗談だ。いい反応をありがとう」

急に噴き出した少年は、目尻に涙を浮かべながら謝ってくる。

「わかって言ったのか……」

「おう、男子のわりに可愛い顔だが、女体を見ることに関しちや一家言ある俺の目は誤魔化せねえぜ？」

「なにその胸を張れない特技」

「そう呆れた顔をすんなって。細身だがお前の体つきを見れば一目瞭然だ。流石についてるもんは、ついて……」

と、そこまで言った少年は改めて俺をまじまじと見る。

「……ついてるよな？」

「ちよつと自信なくなってるのやめてくれる!?」

そのノリも冗談なのはわかってるが、流石に泣くぞコラ。

「ほんとに悪かった。悪気はないんだ。俺、この付属下等学園から上がってきた、八代英次だ。お前は？」

「アザレア下等学園の息吹翔だ。よろしく、八代くん」

「英次でいいよ、翔」

「じゃあ英次で」

「おう！ 一年間、よろしくな！」

「こちらこそ」

俺が手を差し出すと、英次はがつつくように俺の手を握ってきた。

よかった。とりあえず、デリカシーはないが悪い奴ではなさそうだ。デリカシーはないが。

まあ、これなら仲良くなれそう――

「いやー、しっかし！ 危うく一目惚れするとこだったわ！ お前、相当な逸材だぜ？ はっはっはー！」

――うん、やつばこの無神経さは好きになれないかも。ていうかゼツタイわざとだろ。

「それより、翔よお。お前なんでこの学園に来たんだ？」

「え？ ……まあ、強いて言うなら家から近かったから、かなあ」

「ほーん。無難な理由だな」

「そういう英次はどうなんだよ？」

「俺か？ 俺はまあ、外部受験面倒くさくて、そのまま上がってきた」

「お前、それでよく俺に無難な理由とか言えたな！」

俺は思わずそう突っ込んでしまった。

「はははっ！ 確かにそうだな。けど、もちろんそれだけじゃないぜ？」

「？」

「お前だってわかってんだろ？ このアマリス上等学園には、県内で唯一、敷地内にアレがあるじゃねえか」

意味深な表情で英次が言った、そのときだった。

入学式が終わり、すでに教室には半数以上の生徒達がいて、思い思いに雑談に華を咲かせていたのだが……それは別のどよめきが教室中を支配した。

「おい、あれマジかよ！」

「嘘でしょ？ ウチに進学したの？」

「ビックリだぜ。あんな大物が——」

「きやあああああ！ こっち向いてええええええ！」

クラスメイト達の視線は、出入り口のドアに向けられていた。

そこに立っていたのは、一人の男子生徒だった。

体格は中肉中背。青と紫に染めた髪を逆立て、新品のブレザーをぴっちり着込んでいる。

教室を見渡す目が鋭いこともあり、どこか不良少年を思わせる雰囲気があるが、それは「自分に對する絶対的な自信」という強烈に人を惹き付けるステータスへと昇華されている印象を受けた。

そんな、自信に溢れた少年には、周回遅れで流行を知るような俺でも見覚えがある。

「おいおいおいおい、マジかよ。アイツ……木山豪氣じゃねえか？」

「ああ、そうみたいだな」

英次の呟きに、俺も頷いた。

「やっぱアイツ、アレが……校内に設置されているダンジョンが目的で、ここに来たんだろうな」  
英次は、「随分な大物が来たもんだぜ」と感心しつつ、喉を鳴らしていた。

木山豪氣。何を隠そう彼は、昨日吉田さんが言っていたSランクのダンジョン攻略パーティー  
【ボーン・クラッシャー】の一員なのだ。

西暦2000年、日本各地にダンジョンが出現した当時の社会的混乱は大きく、自衛隊によって封鎖されていた。しかし、物好きな者達が好奇心に突き動かされるがまま入ることも多く、そのまま帰ってこなかった事例も枚挙に暇がない。

その結果。ダンジョン事変やあとを絶たない犠牲者への対策として、2002年、ダンジョンの機能や安全性を詳らかにし、社会的混乱を抑えるための専門組織——ダンジョン運営委員会が設立された。

その後、委員会は、未知の部分が多いダンジョンの探索や調査、安全利用するための法整備やアイテムの開発に着手する。

そして2014年。度重なる調査と研究の末、ダンジョンの機能の大部分を把握し、法律の改正と共にダンジョンの一般開放を宣言。

ダンジョン内の安全が確保されたことで、ダンジョン探索をスポーツやアトラクションとして楽しむ者達がダンジョンへ押し寄せる。さらにはインターネットや各種SNSの普及に伴い、攻略の様子を配信するダンチューバーが現れた。

今や、リアルに異世界の空気を楽しむことができる場所として、多くの者達を魅了してやまない。

【ボーン・クラッシャー】も、その流行に乗る形で最近急速に知名度を上げてきた高ランクパーティーだ。今最も勢いがあるパーティーとの呼び声も高く、そのメンバーの存在にクラス中がいや、学園中が騒然とするのも無理もない話だった。

そんなダンジョン冒険者の憧れとも言える木山豪氣がこのアマリス上等学園に進学した理由を推測するなら、それは一つしかない。

何を隠そう、日本中に出現したダンジョンの入り口の一つが、ここアマリス上等学園の敷地内にあるのだ。

そんなわけで、ここはダンジョン冒険者達の第一志望校となることが多く、豪氣もまたそのご多分に漏れず、ここへの進学を選んだのだろう。

「おう、今日から世話になる木山豪氣だ。知らねえなんて不屈き者はいないと思うが、よろしく」ズカズカと大股で教室に入ってきた豪氣は、傲岸不遜にそう言い放つ。

聞く人が聞けばムツとする自己紹介だが、コイツに関してはそれが「男前だ」として逆に株を上げている。

女子連中に至っては、メロメロになってるし。

「で、どこだ俺の席は」

「え、えっと……ここみたい、ですー」

急に話しかけられた女子生徒が、ビクリと肩を震わせて言葉に詰まりながら答える。

「サンキュー」

「い、いえ」

話しかけられた女子生徒は、夢見心地というような顔で豪氣の背中を見送る。

そして、豪氣が向かってくる先は——俺の斜め後ろの席だった。

「よお、お前等もダンジョンに憧れて来た口か？」

席に着くなり、俺にそう話しかけてくる豪氣。

「いや、そういうわけじゃないけど……」

「そうか。けど、ダンジョン冒険者の登録くらいはしてんだろ？ 役職はなんだ？ ランクは？」

身を乗り出して食い気味に聞いてくる豪氣。

俺は少しの間逡巡してから、意を決して答えた。

「……【弓使い】だけど」

「あ？」

瞬間、豪氣の目が鋭く細められる。

剣呑な雰囲気、豪気の身体から発せられ――

同時に、ザワザワと周囲のクラスメイト達が騒ぐ声が聞こえてきた。

「おい、今の聞いたか？」

「あの女子みたいな野郎、マジかよ。正気か？」

「【弓使い】って、最弱役職だろ？ 使ってるヤツ誰も見たことないぞ」

「【弓使い】とか、【魔術師】の下位互換だろ？ 連射ができない、近接攻撃手段がない、攻撃威力もカス。それなのに役職チェンジすらないとか……」

「頭バカすぎんだろ」

ああ、やっぱそーゆー反応になったか。まあ、わかりきっていたことだ。これは豪気の答えも同じような感じに――

「――そうか。そりや大変だな」

いつの間にか剣呑な気配を収め、豪気がそう笑いかけてくる。

正直、少し意外だった。てっきり、他のヤツらと同じ反応を示すかと思った。実際、少しばかり侮蔑に似た視線を向けていたし――だが、それもどうやら気のせいだったみたいだ。

「まあ、いろいろバカにされる役職だしね」

「違えねえ。同情するぜ」

そう言って、豪気は八重歯を見せて笑う。

と、前の席で俺と豪気のやり取りを見ていた英次が、そつと俺に耳打ちしてきた。

「（流石Sランクパーティーの人間だぜ。懐が深えな）」

「そうだね」

本山豪気。唯我独尊を地でゆく彼だが、人前で俺をディスったりしなかった。正直、こういう手合いは珍しい。

コイツとなら、仲良くやっていけるかもしれないな。……開口一番「なんで女子が男の制服着てんだよ！」とか言ったどこぞのデリカシー壊滅男とは違って。

「おい翔？ なんか生ゴミを見るような目を俺に向けてないか？ 俺達友達だよな？ 友達になっただだよな？ なあ？」

脂汗を垂らしながら、英次が戦々恐々と確認を取ってくるが、とりあえずそっぽを向いておいた。

「なんで無視すんだよお！」

「大丈夫、無視は信用の裏返しだから（にこつ）」

「これっぽっちも信じられない笑顔をどうもありがとう！ 目が笑ってねえ！」



入学式後の自己紹介とHRが終わり、やってきた休み時間。

トイレへ行こうと廊下に出た俺は、冒険しながらに広い校舎内を歩き回っていた。男には気分任せて放浪したいときがあるのだ。だから、慣れない校舎内で迷ったわけじゃないぞ？

「……ん？ あれは」

ふと、俺は足を止めた。

廊下の窓から見える校舎裏。鯉の泳ぐ小さな池の畔で——二人の男女が何やら話しているのが見えた。

「なああんた、ダンジョン攻略とか興味ある？ 実はこちらのパーティーに欠員が出てな」

「え？ わ、私ですか？」

「ああー」

「ごめんなさい。私……あんまりそういうの、わからなくて」

女子生徒は、苦笑いしながら一歩下がる。が、男の方はそれが見えていないわけでもあるまいに、一歩彼女の方へすり寄った。

ああ、これ完全に迷惑がられているな。

男の方は、ここからだど丁度影になっていて顔がわからない。ていうか、フードを被ってるからどのみち顔がわからん。

それよりも、あの言い寄られてる子、めっちゃ可愛くないか？

そんな風に思った、そのとき。

不意に、同じく廊下を通りかかった男子生徒達の会話が聞こえてきた。

「おい、あの子めっちゃ可愛くね？」

「バカお前知らねえのかよ！ 高嶺乃花<sup>たかみねのんか</sup>って言や、内部進学組じゃ知らねえ人はいねえアマリスのアイドルだぞ！」

「アイドル？」

「ああ。去年の『ミス☆アマリスコンテスト』で、二位に大差を付けて圧勝した、超絶ウルトラ美少女さ。もちろんスポーツ万能で頭脳明晰<sup>ずのうめいせき</sup>。あまりにもハイスベックすぎて、付いた二つ名は『高嶺の花<sup>たかみねのはな</sup>』ッ！」

いや、そのまんまじゃねえか。

思わず心の中で突っ込んでしまった。

名は体を表すとはまさにこのことだな。

しかし、学園のアイドルか。改めて見ても目が離せないくらい美人だ。

揺れる麦穂<sup>むぎほ</sup>を想起させる、艶やかな長い金髪。海のように深く透き通った青い瞳。雪も欺く白

い肌。

女性らしい身体のラインを誇りながら、顔にはどこかあどけなさを感じる可憐<sup>かれん</sup>さがあり、見る者の心を掴んで離さない。

「しかし、あの不審者<sup>ふしんしゃ</sup>も強引に誘ってんな。高嶺さんがダンジョンに興味あるわけねえのに」

「あー、それはそうかもね。なんというか、あんなお淑やかな人がモンスターを倒す姿は、想像できないかも」

そんなことを言い合っていた男子生徒だったが、その声が聞こえたのだろう。

不意に舌打ちした男が、男子生徒達を振り向いて不機嫌そうに鼻をならす。

「げっ、やっべ聞こえてた！ 行くぞ、絡まれたら面倒だ」

「う、うん」

男子生徒達は頬を引きつらせ、一目散に逃げていく。

「けっ。外野どもが。見せもんじゃねえぞ」

「あ、あのどなたか存じませんが……私、このあと用事があるので、そろそろ行っちゃダメですか？」

「待て。まだ話は終わってないんだ。あんたがウチのパーティーに参加してくれたら、士気が上がる。特に、今日の夜《全国同時生配信》で行われる『ダンジョン攻略タイムアタック大会』に欠員が出るのは避けてえんだよ。それだけでポイントがマイナスになるからな」

「だったら、私なんかより適任の子がいると思うけど。ほら、ここは君みたいなダンジョン冒険者がたくさん集まる学校でしょ？」

「へっ、癪だがもう何人も声をかけたさ。けど、どいつもこいつもてんで話にならないザコばかりむしろ足を引っ張られるだけだ。だったらあんたみたいな顔だけ可愛い守られ役ヒロインがいた方

がいい。それに、配信されてつからバカな視聴者どもが鼻の下あ伸ばしてくれる。見世物としちゃ及第点なんだよ、お前は」

「っ……そ、そうですか」

アイツ、自分がめちゃくちや失礼なこと言ってる自覚あんのか？

眉をひそめ、遠巻きに成り行きを見守っていた——そのときだった。

俺は、一瞬自分の目を疑った。

「だから、あんたに協力してほしいんだ！ 悪いようにはしないからさ、なあ！」

ずいっと身を乗り出して、しつこく勧誘するフード男。

そんな彼の右手にはスマホが握られていて——次の瞬間、あろうことか高嶺さんのスカートの真下に差し込まれた。

「なっ!？」

コイツ、よりによって盗撮してやがる！ 普通に犯罪だぞ！

しかも、本人は気付かれていないつもりでやっているみたいだが、高嶺さんは頬を引きつらせて一歩後ずさっていた。

「くそっ、あのゲス野郎が！」

なにが、「悪いようにはしない」だ。現在進行形で悪いようにしてるじゃねえか！  
俺は一瞬にして頭に血が上った。

触らぬ神に祟りなし、君子危うきに近寄らず。などとはよく言うが、流石にこれは見過ごせない。見過ごしていいはずもない。

おい、お前！

俺は思わずそう叫んでフード男を問い詰めようとして——思いとどまる。

普通に問い詰めても、スマホをサツと隠された上で、「は？ 盗撮？ してるわけねーだろ？ バカじゃねえの？」と暴言を吐かれるだけだ。それでは、なんだか勝ち逃げされたみたいで癪である。

それに、直接盗撮を指摘したら、高嶺さんとしても恥ずかしいはずだ。

だから、ここはアイツだけ恥ずかしい思いをしてもらうように仕向けるのがベスト。

俺はポケットから愛用の小さな弓矢を取り出す。小型の金属矢もあるが、そんなものを使えばスマホを貫通して最悪手元で大爆発。高嶺さんまで巻き込まれかねないから選択肢から外す。

代わりに、ポケットをまさぐっていた俺は、あるものを取り出した。それは、ガムテープの欠片を丸めたもの。なんでそんなものがポケットに入っていたのかというと、先ほどの授業で、自己紹介カードを書いて教室の後ろに貼ったときに使ったガムテープの余りを突っ込んでいたのだ。あと、なぜかやたらと粘着力が強い超強力仕様。

それを、小さな弓矢にセットする。

狙う先は、スカートの下に見えているスマホの本体——その右上にきらりと光るカメラのレンズ。

ここからの距離は十メートルほど。的は小さいし、一歩間違えれば高嶺さんに当たってしまうが、そんなヘマはしない。

丸めたガムテープを乗せたゴム紐を引き絞る。

ゴムが十分に力を溜めたところで、薬指を離し、力を一気に解放した。

「っ！」

パヒュンと風を切る音が鳴り、ガムテープの弾丸が一直線に飛ぶ。

そして——狙い過ぎ、カメラのレンズに張り付いた。

これでよし。とりあえず、ここから先の盗撮は防げたわけだ。

あとは、あのフード野郎を退散させるだけ。

俺は近くにあった扉から外に出て、何食わぬ顔をして男の方へ近寄った。

「おい」

「ッ!？」

声をかけた瞬間、フード男はビクリと盛大に肩を跳ねさせる。それから、首がねじ切れんばかりの勢いで俺の方を振り返った。

「はい！……って、なんだよ。誰かと思ったら最弱役職のゴミ屑くんじゃないか。俺に何の用だよ」

？ コイツ、俺が【弓使い】だってことを知ってる？ どっかで会ったか？

いや待て。この声の感じ、意図的に低くしているような違和感があるけど、どっかで聞いたような……

妙な引っかかりを覚えたが、今はそんなことはどうでもいい。

「その子が困ってるだろ？ その辺にしといたら？」

「は？ 何？ お前、ひよつとしてナイト気取り？ 女子の前で格好付けたいからって、身の程を弁えた方がいいんじゃないの、無能くん？」

ちっ、ウザいやツだ。

が、この反応は想定内。だからこそ、俺はもう一つの弱みを突くことにした。

「ん？ ちょっと待て」

「あん？」

「そのスマホ——」

「ッ！ す、スマホがなんだよ」

フード男の声がわずかに上擦るが、それに畳みかけるように俺はスマホを指さした。

「ふっ。なにこれ。ガムテープを付けてるとか、どんなファッション？」

「え……は？ んだよこれ、いつの間に！」

フード男は、慌てたようにガムテープを剥がしだす。が、ガムテープの弾丸はとれたものの、ベタベタとしたノリがレンズにくっついたままだった。冷蔵庫に貼ったシールを無理やり剥がしたと

きと同じような感じに。

「く、くそっ！ どうなってるんだよ！ お、お前！ さては俺のスマホに付けやがったな！」

「はあ？ そんなわけないだろ。俺は今来たところなのに、いっとうやって付けられるんだよ」

「っ、それはっ！」

ぐうの音も出ないとばかりに、フード男の歯噛みする気配が伝わってくる。

まあ、正解なんだけどね。

「大方、ポケットの中にガムテ丸めて突っ込んで、スマホにくっついたんじゃないの？」

「……ちっ」

言い返せなくなったフード男は、舌打ちだけ残して爪でレンズにこびりついたノリをこそぎ落とそうとする。

ここまで——想定通りだ。

「はあ、仕方ないな。こういうのって、ただ闇雲に剥がしても意味ないんだよ。貸してくれ、俺が剥がす」

カメラレンズを封じても、それまでの盗撮のデータはスマホ内に残っている。盗撮を指摘してもはぐらかされ、逃げられるのがオチ。だから、直接指摘するんじゃなく、逃げられない状況へ誘導する。

「は、はあ？」

案の定、フード男はたじろいだ。ただ「ありがとう」と言ってスマホを差し出せばいい状況で、明らかに不自然に。

「だから、スマホを貸してくれればいいんだよ。それとも……何か貸せない事情があるとか？ 例えば、やましい画像が入ってるとか」

「ああ!? んなわけねえわ! 死ね!」

「じゃあいいだろ? 貸してくれよ」

やましい画像はない、と本人が言ったのだから、拒む理由はないよな?

俺はフード男に詰め寄り、スマホをつかむために手を伸ばす。

「ちょ、ちよっ待——」

その瞬間だった。焦った男の手からスマホがつるりと滑り——ポチャンと、いつそ間拔けな音とともに側にあつた池に吸い込まれていった。

取り上げてデータを削除する想定だったが、そうするまでもなくヤツのスマホはデータごと消滅した。

「なっ、あ!」

「あ、悪い」

思わず謝ってから、そうする必要はなかったかとも思い至る。

「悪い、じゃねえよ! 人のスマホ壊しやがつて! どう責任とってくれるつもりだ! ああん?」

後ろめたいものがなくなったからか、急に勢いを吹き返すフード男。焦ってスマホを落とした原因を作ったことは申し訳ない。が、それはそれとして、罪を犯しておいてこうまで自分のことを棚に上げられるのは一周回って尊敬する。

まあとにかく、盗撮データは消えてくれたわけだし、初期目標は達成した。さっさと退散してもらうという。

「あれ、このスマホ」

「あ? 今度はなんだよ!」

幸いにも浅瀬にあつたスマホを拾い上げた俺は、泥で汚れたボタンを押す。もちろん、完全にイカれていて画面は付かない。……が。

「まだ壊れてないな」

「ッ!」

「あ、大丈夫だ。カメラも使える。よかったな。写真のフォルダは無事——」

「返せッ!」

ハタタリに見事騙されたフード野郎は、俺の手からスマホをひったくると乱暴にポケットにしまふ。

「くそが! テメエ、いつか覚えてやがれ!」

フードで隠れていてもわかるくらい顔を真っ赤にして叫び、肩を怒らせて逃げるようにその場を

去っていく。

とりあえず、成敗は完了だな。

これ以上この場にいる理由もないため、俺も踵を返して立ち去ろうとして——高嶺さんに呼び止められた。

「あ、あの……ありがとうございました」

「ん？ ああ、別にお礼を言われる筋合いはないよ。俺はなんもしてないから」

「いえ、助けてくださったじゃないですか。百発百中の【弓使い】さん」

「……え？」

俺は一瞬呆気にとられた。まさか、俺が狙撃したのを見ていたのか？

が、それを確認する前に、彼女は深くお辞儀をして去っていった。そして、一人取り残された俺の耳に休み時間の終了を告げるチャイムが届く。

「……あ！ トイレ行ってなかった！」

その後、俺は、次の休み時間までトイレを我慢する地獄の時間を過ごすことになった。



その日、学園が終わったあと俺はセンター・ダンジョンに直行した。



学園の敷地内にあるというダンジョンではなく、わざわざ遠くのセンター・ダンジョンを訪れた理由は、単純に最も訪れた回数が多く、慣れている場所だからだ。

ただ、今日はいつもと様子が違った。

「今日、人多いな」

ダンジョンの一階層。これから攻略に赴く冒険者達が一堂に会する広いエントランスは、普段よりも多くの人で賑わっていた。

「あー……そういや今日は、タイムアタック大会があるんだったつけ」

タイムアタック大会。

その名の通り、特定のコースを通じてモンスターを狩りながらゴールを目指し、そのタイムをパーティー単位で競う大会である。

年に一度、センター・ダンジョンにて行われる大規模なイベントであり、日本全国から猛者達が集まってパーティーの強さを示すのだ。

そんなわけで、今日この場所には日本全国のハイランクパーティーが集まっているのである。——まあ、俺には縁のない話だけだ。

俺は、熱気溢れるエントランスを抜け、一人下層に降りるための転送陣へ向かう。

俺は別に、この大会に参加するつもりはない。

大前提として、俺は目立つのがそこまで好きではない。斜に構えているとかそういうのではなく、

その方が気が楽だからである。誰かから注目されるというのは、人が生きるためのモチベーションになるが、行きすぎれば心をすり減らす諸刃の剣だ。

そりゃもちろん、承認欲求みたいなものはある。でも、それは【弓使い】として純粋にダンジョン探索を楽しむことの魅力とは比べるべくもない。

俺は誰にも邪魔されず、この平穏な日々を噛みしめていたい。それ以上でも、それ以下でもないのだ。

「まあ、あれこれ言う前に、この大会、パーティー単位での参加が必須条件だし、俺はソロ冒険者だから参加資格なんてないんだけど」

さて、ぼちぼち稼いで帰るか。正直、俺には縁のない世界だからな。

そう思いつつ、俺はゴーグルをかける。

鼻付近まで覆ってしまう大きなもので少し野暮ったく見える半面、暗視効果が付与されていて、グラスに狙撃用のスコープも表示できる優れものだ。

準備を整えた俺は、溢れかえる熱気を背にダンジョンの中層——三十八階層へワープした。



ダンジョン三十八階層に入ってから、およそ二時間。

俺は、ひたすらモンスターと戦っていた。

『キュイイイイイ!!』

暗く狭い洞窟の向こうから、甲高い声かんだかが響く。

薄闇の向こうに、二つの赤い光が見えた。

と思ったのも束の間まとま。赤い光は闇を裂いて、洞窟内を縦横無尽じゅうおうむじんに飛び回りながら肉薄にくはくしてくる。暗視効果を付与されたゴーグルを通し、モンスターのシルエットがくつきりと映る。

モンスターの名はランクBの“ゲープ・エイブ”。

赤く光る瞳孔どうこうと、灰色の毛並み特徴的なサル型のモンスターだ。

鋭い牙と並外れた跳躍力を持ち、凄まじい速度で飛び回りながら獲物を追い詰めていく小柄なハンター。

が、そんなダンジョンのハンターさえも狙うのが、【弓使い】アーキアーという役職ジョブである。

俺は咄嗟とつさに弓矢を構える。

左手で弓柄ゆづかを握りしめ、右手で矢を大きく引き絞り、一気に放った。

「そこだ！」

風を切って飛翔する矢は狙い過たず空中にいる“ゲープ・エイブ”の眉間を撃ち抜き、絶命させる。

が、俺は警戒を解かない。

威力が弱いと言われる弓矢で、一撃で仕留められるレベルの“ゲープ・エイブ”がランクBという高ランクに位置している理由。

それは——基本的に、一匹で狩りをしないからである。

『『『キシャアアアア!!』』』

刹那、甲高い声が洞窟中を満たすように乱反響し、八つの赤い眼光が俺を睨みつけた。

「来たー！」

再び弓を構える俺の方へ、四匹の“ゲープ・エイブ”がバラバラに飛び回りながら肉薄する。

狭い洞窟内。接近されるまでに四匹を撃ち落とすには、連射力の低い弓では到底間に合わない——普通なら。

俺は背中に背負った矢筒から矢を四本抜き取り、それぞれ指の間に挟む。

四本の矢を同時に弦に引っかけ、めいっばい引き絞った。

「四発同時発射！」

刹那、四本の矢を同時に放つ。

連射力の弱い弓矢で、複数の敵を射貫くために編み出した俺だけの必殺技だ。

正直、習得するまではかなり時間がかかった。

普通に【魔術師】マジシャンになれば、そんな手間もないのだが、それをしなかった理由はただ一つ。俺が、弓矢を極めたかったからだ。

今は亡き父が、弓道大会の日本王者だと知って、その卓越した技量に胸躍らせた、小さな頃から放たれた矢は光の筋を残して、全ての“ゲープ・エイプ”をまとめて刺し穿った。

断末魔の叫びを上げる間もなく、ドサドサと倒れていく“ゲープ・エイプ”達。

俺は息を吐きつつ、“ゲープ・エイプ”達のもとへ向かい、死骸を拾い上げるとアイテムボックスへ放り込んだ。

倒したモンスターは、落としたアイテムや死骸を、そのまま金と交換できるシステムになっているのだ。

「今日のノルマは達成だな。亜利沙も家で待ってるし、早く帰ろ」

俺は踵を返して、第一階層に繋がっている転送陣へ向かおうとした、そのときだった。

ゴゴゴゴゴゴ……と、低いうなり声とともに、ダンジョン全体が大きく揺れ出したのだ。

「な、なんだ!？」

驚く間もなく、洞窟内の天井にヒビが入り、パラパラと小石や砂が落ちてくる。

これは、崩落しそうな雰囲気だ。

「うっそだろ!」

俺は咄嗟に崩落から逃れるため、全速力で走り出した。

ダンジョンに入る際は、保険として“生還の指輪”というアイテムを身につけることが義務化されている。

ダンジョン運営委員会が数多くのダンジョンを調査し、スキルや魔法といった特殊な機能を抽出して指輪に集約したものだ。

その名前の通りダンジョン攻略中にモンスターに殺されそうになったり、崩落に巻き込まれたりしたときなど、本人が負ったダメージが一定を超えたところで第一階層にある救護室に転送される仕組みになっている。

だから、天井の崩落に巻き込まれても死ぬことはないが、最悪の場合骨折くらいはしてしまうだろう。

流石に学園デビュー初日から入院生活なんて、洒落にならない。

「ま、間に合え!」

背中からイノシシが迫ってくるかのような重圧に耐えながら、ひたすら走り続け——なんとかドーム状に天井が広がる広い場所に出た。

「はあっ! はあっ! ここまで来れば……!」

俺は肩で息をしながら、後ろを振り返る。洞窟の天井には亀裂が入り、崩落寸前と言った様子だった。どうやら間に合ったようで、俺はほっと胸をなで下ろす。

と、安心すると同時にとある疑問が俺の中で生まれた。

どうして突然、天井が崩れるような事態になったのだろうか?

余程のことがない限り、ダンジョンの外壁や天井は崩れないようにできている。